伝統文化

家族、親戚、父系出自、両系出自、親族の範囲、門中、本貫、氏族、派、トルリム字、行列
冠禮、婚礼、仲媒、宮合、納幣、ハムジンエビ、初行、新行、幣帛、再行、喪、臨終、殮襲、喪祭、弔問客、發靷、弔問、茶禮、忌祭、墓祭、祭主、神位、祝文、飲福

1. 家族と親族

韓國の親族の特性

家族というものは夫婦と子供が集まって成り立ち,共に暮らしながら經濟的に一つの單位を成す.このような家族が擴大されて親族が形成される. ここでは親族は親戚と同じ意味を持つ用語である.

親族は出資, 相續, 繼承 などの原理に基礎を置いている. 韓國では子供達は父の姓を名乗り, 財産相續や祭祀の繼承が男子に受け繼がれる事から父系出自が基本である. しかし冠婚喪祭などでは母系の親族とも關係があるため兩系出自の姿も見られる。

親族の範圍

韓國の親族の名稱は父方系統を中心にしている. 直系の場合は上下４代までが親族である. 父系である親從では 8 親等, 姑從では 6 親等までが親族の範圍に含まれる. 母系では上に 4 代,下に２代まで、そして６親等までが含まれ, 妻家の場合２代上下に限定され、4 親等までが親族の範圍に含まれる。

門中

門中は親族が集まって成り立っており、本貫と姓で表示される. 韓國の姓は男系血統を表わすものであり、誰でも一旦生まれれば父の姓を受け繼ぐ.しかし奴婢の場合と僧侶の場合は姓がないこともあった.本貫は男系血統の始祖の發祥地または長い間住んでいた居住地を表わす。これは男系血統を表わすもので同姓同本は氏族を意味する。
韓國社會で氏族概念と姓の意識が未だに根强く殘っているのは事實である。戸籍に本貫を記して父系血統を明らかにするだとか、門中で族譜を作ったりする事がその證據である。最近までは近親の間の婚姻を防ぐと言う理由で同姓同本の男女は結婚する事が出來ないようにする法律があった。

姓に多くの種類があるように本貫もやはりその種類が多く、金氏や李氏の場合は 500 余種にも至る。同姓同本でも氏族によってはその數が數万名になることがある。從って同姓同本の氏族はおのおの派を持つことになる。しかしこの派は氏族ごとにその數がおのおの別である.

派が發生する最も重要な動機は氏族内から有名な高官が出たり有名な學者がいる時に出來るのだが、この派は再び派を生み全州李氏の場合は歴代の王子や王を派の始祖として 200 余派を成したりする。

このように各派は有名な先祖を中心として一派を形成するが、この時の始祖を派始祖と言い派始祖を中心に組織された集團が門中である。

一方、君主が姓を下賜する場合もあった。例えば安東權氏の始祖クォンヘンは本來は金氏であったが高麗太祖が權氏姓を下賜した。反面高麗高宗ときチェチュンホンは王が下賜した「王」氏姓を拒否した。このように君主が姓を下してくれることを賜姓と言う。

名前と行列

韓國人たちは大概名前に行列字を持っている。兄弟は兄弟同志,父の兄弟はその兄弟同志に行列字(トルリムチャ)を持っているものである。また 4 寸 6 寸 8 寸でも同じトルリムチャを使うことによって兄弟關係を表示することが出來る。このように血族の系譜の中でその人が先祖の何代目になるのかを表すのが行列字である。家によっては行列が年齢より優先になる。

2. 冠婚喪祭

冠禮

冠禮とは子供に成人になったことを象徴するためにカッを被せる儀式である。このときカッと言うのは成人である事を表す頭に頂く帽子をさす。冠禮を行なう前は子供として扱われるが一旦冠禮を終えた後は成人社會に參加できた。

この冠禮は普通男子は 20 歳、女子は 15 歳前後に行なわれるが、この時は冠禮を受けた者が精神的、肉體的に成熟する時機である。朝鮮後期には 10 歳前後に行なわれる事もあったと言う.女子の場合には母が髪を結い、簪を刺す事で終えていた。

今日この冠禮は民俗から消えてしまい、以前でも上流層だけで行なわれていたもので、庶民層では婚禮に含まれていた。このような風習が消えた事の原因としては甲午更張(甲午革名)時の斷髪令を擧げる事が出來る。

婚禮

傳統婚禮では仲人(＋仲媒人:結婚が行われるように中間に入り紹介する人間)によって仲人が入ってくると、兩家では相手家の事情について調べて相性や當事者の人柄を見る。當事者の父母同士が二人を婚姻させる事に合意すれば四柱緞子と請婚書を送る。四柱は白い紙に新郎の生年月

日時を記して大きな封筒に入れて表に四柱と書いて裏面には謹封と書く。四柱を受け取った新婦の家からは婚姻する日時と箱を受け取る日時を定めて新郎の家に知らせる。
箱を送ることを納幣と言う。箱は婚姻前日に送ったり當日に新郎とともに送ったりもするが地方によっては箱にたくさんの品物を入れて送ったりもする。しかし以前には一般的には新婦のチマチョゴリの生地を２反程度と婚姻文書を入れて送った。

婚禮を上げるために新郎が新婦の家に行くことを初行と言う。新郎の一行が新婦の村に着くと新婦の家から人が出てきて彼らを「母屋」に案内する。母屋は新郎の一行が少し休む所で新郎が來た方向から見て新婦の家を通り過ぎない所に位置する。

新郎が母屋で婚禮準備をする間,新婦の家では納幣の準備で藁薦を敷いて膳を置いて屏風を立てると長持ちの擔ぎ手は箱を擔いで膳上に置く。この時新婦側の福の多い女性がこれを受け取って居間に持ってゆき、敷いて座りながら「福たくさん來たね」と叫ぶと新婦の母親が箱に手を入れて最初に取った服地の色が何色かを見て長持ちの擔ぎ手たちに酒をもてなす。

納幣が終わると、すぐに婚禮式が擧行される．新郎が門の前の釜を踏んで乗り越えてくるとその後から木製の雁を持った人がついてくる。この雁を新郎が受け取り北側に向かい膳の前に座る。雁を膳の上に置き、大きくおじぎを二度する。この時新婦の母が雁を新婦がいる部屋に投げ入れ雁が立てば息子が授かり、寝ていたら娘を授かると言う話もある。

新郎が座っている位置を變え、交拜膳の東側に立って手を洗い、南側に向かって立つと、新婦が顔を隠して出て來て手を洗い、北側を見渡し立つ.新郎新婦が向かい合って立った後、新婦が新郎に二度おじぎをすると、新郎が新婦に一度おじぎをして、次にいっしょに一度おじぎをする。新郎新婦が席に座り酒をそれぞれ二杯ずつ飲み、三杯目は互いに取り替える.これによって婚禮式が終わる.
新郎新婦が新婦の家で宿泊(해목이或いは달묵이)をして新郎の家に向かう事を新行という。この時,新婦側の代表がついて行く.新婦は家で準備してきた料理を整えて新郎の御兩親にあいさつをするのだが、これを幣帛という。

以前は嫁いで農作事を手傳い、そして收穫した穀食で食事を作り新婦が實家にでかける再行をすると、こうやって里歸りをしてきた後に新婦はその家の嫁として本格的な生活を始める事が出來たのである。

喪禮
葬というものは元來、死を意味するもので、特に子女が父母の喪に服する時に喪という。父母の病が危篤狀態となり死機が近付づくと,周りの者は病人を居間や板の間に運ぶ。息子は父母が

息をひきとるのを見届けるのであるが、これを臨終という。臨終を見届けられない事は大變な親不孝であるといわれる。
臨終の間に移された父母は頭を東側に向けられて新しい服に着替えさせられる。
死亡が確認されれば死んだ人の服を持って庭に出て服を振り回しながら死んだ人の姓名と住所を唱えた後"振り返って服でも持って行きなさい"と叫んだりもする。そしてその服は屋根の上に投げ上げておき、後で降ろして屍體の胸の上に載せる。このようにした後で屍體を臨時にゆわえて七星板という板の上に寝かせ布團をかぶせて屏風で覆う。この後屍(なきがら)を入棺する前に體を洗ってやり服を着替えさせた後、きつくゆわえるのだが、これを殮襲という。
入棺後、喪制は喪服を着て祭祀を行った後、弔問客を迎える。

喪輿が出る前日の夜には喪輿遊技をする。喪輿遊技は喪輿の擔ぎ手が空の喪輿を擔いで庭を何回か回ることである.
葬日當日には部屋から棺を出し、發靷祭を行って過ごす。發靷祭が終ると喪輿擔ぎ手が喪輿を擔いで三度上げ下げりして挨拶をした後、葬地に向かう。
喪輿が葬地に到着すると弔問を受けて棺を墓穴に下ろすのだが、この時、頭を北向きにする.喪主が土をかけ、墓が平地と同じ様になれば祭祀を行い人達は歸っていく.

祭禮
儒敎の祭禮はある家族にとって最も重要な日の一つで先祖を崇拜すると言う意味を持つが朝鮮王朝五百年の間は國を治める理念でもあった。このような祭禮は家庭では家族の關係を强化する役割をもつ.
このように先祖を崇拜する祭祀は色々があるが大きく茶禮、忌祭、墓祭に分けられる。茶禮はだいたい元旦と秋夕に行うことを指す。忌祭は地方によって亡くなった日を過ごす場合もあって誕生日を過ごすこともある。上に4代までを送るもので一年にだいたい八度ほど行うことになる。墓祭は地域と家門の間で違いが大きいが、5代以上の先祖に10月に行う祭祀を指す。

祭祀膳がすべて整うと集まった人達が茶禮どおり立った後、祭主が前に進んで跪いて座り燒香した後二度おじぎをする. そうすると他の人たちはそれにならって二度おじぎをし、祭主が神位の前に再び座って杯を差し上げる. このようにして初めて杯を差し上げた後に祝文を讀んで次の人が杯を差し上げる. 三番目の杯を差し上げる時は杯いっぱいに注がず、四番目に添酌をする. 杯を差し上げた後には必ず杯を差し上げた人が二度おじぎをする.
杯をすべて差し上げた後匙を底が東側に向くようにして山(御飯)に刺してはしを選ぶ. 他の人達はしばらく外に出ていた後、再び入って羹(ケン 汁)をスンニュン(숭늉)にし、飯の山を少しずつ掬って汁と混ぜ、暫くして匙と箸を元どおりに戻し飯山の蓋をかぶせる. すべての人が二度おじぎをして紙榜を祝文といっしょに燃やして酒または食事を分けて食べるのだが、これを飲福と言う.

3. 民間信仰

巫俗

最近、韓國社會では巫俗を迷信と勘違いするケースがある。しかし、韓國では巫俗が宗教的な役割もするが、醫術と占術以外にも藝能娯樂的な機能も持っている。こうした巫俗は儒教の形式主義からの脱出を可能にした。

地方によって巫俗のスタイルはすべて異なる。慶尙北道と忠淸道は儒教の影響を受けて巫俗勢力が弱い。巫堂になる方法は大きく 2 つに分けられる。京畿道のマンシン(만신=女巫)は巫病に病み、有力な巫堂を訪ね、神母(신어머니)の神娘(신딸)になり、降神巫(내림굿)を受ける。こうすると巫堂になる。こうした方法は中部地方以北がすべて同じである。東海岸を含む中部地方以南では全羅道のタンゴル(단골)、慶尙道のムーダン(巫堂)、濟州道のシンバン(심방)がすべて別途の血統があって世襲されている。

巫俗は様々な種類の神を祀り、またそれぞれの神は互いに何の關連がない。クッ(굿)はほとんど十二祭次(열두거리)であるが、それぞれ異なった神々へ對しクッを行うのである。クッが始まるとはじめは鹽などをまき場所を淸める。その次にカマンコリ(가망거리)といいカマン神を祀るが、これは檀君に敬意をはらうことである。という。マルミョンコリ(말명거리)は巫堂が太鼓のばちと鈴を持ち死んでいない神を祀るものであり、サンサンコリ(상산거리)は開城と 京畿道の巫堂にとって重要な神であるチェヨン將軍(崔瑩장군)を祀るものである。この時かいば切りの齒にも乘る。ソンジュウマチ(성주맞이)は家内を保護する神を迎えるものである。ピョルシンコリ(別神거리)は天然痘の神を祀るものであり、テガムノリ(大監놀이)は様々な種類の守護神を祀るものである。チェソクコリ(帝釋거리)は農事などと關聯がある神を祀るものだ。ホグィコリ(호귀거리) は紅疫と關連がある神を祀るものだ。クノンコリ(군옹거리)は氏族の祖先を祀るものである。チャンブコリ(倡夫거리)は藝能娯樂の神靈を通して一年間の惡事を防ぐものである。最後に後餞(뒷풀이)を行う。このように十二祭次(열두거리)を行うときには次々と服を着替える。こうした過程は京畿道で行われている内容であり、地域によって大きな差が見られる。

家神信仰

家神信仰は巫俗と直結し、儒教の祭祀が形式と理念に偏り女性を除外させたため、ここから脱皮する役割も担う。家神信仰の中でも最高とみなされているものは祖靈である。この祖靈は 居間の棚の上に祀られるが、祖上壺(조상단지)の中には春、秋に麥と米をかわるがわれ入れ、それを紙で覆い一つにまとめ動かさない。この祖上壺は結局祖先と農事の神を合致させたものとして長孫の家に祀る。

家内を保護する神をソンジュウ(성주)と言うが、特に家長を保護し板の間に祀るものとされている。嶺南と湖南ではソンチュウドク(성주독)に麥や米を入れ板の間の片隅に祀り、他の所では

板の間の天井に紙を折って貼り付けるが、その中には硬貨を入れておく場合がある。10 月上旬には主婦達が家巫の立場になって告祀を行い近所に告祀餅を配る。

村の祭祀

ある村のすべての人が、その村の産業と村の人々の協同心のために行う祭祀を洞祭という。洞祭はその村の指定された場所で行われるが、これを京畿道と忠清道ではサンシンダン(山神堂)といい、江原道ではソナンダン(서낭당<城隍堂)といい、全羅道と慶尚道ではタンサン(堂山)と呼ぶ。 洞祭の對象、はほとんど神靈的だと信じられている木や岩である。こうした對象物の横に建物を建てておいて祭祀を行うが、場合によっては信仰の對象が忘れられることもある。

洞祭は年の初めや正月 15 日、または 10 月上旬に行いその時刻は子正(午前 0 時)に統一されている。

祭祀を行う人は 40 代以上の男性の中から選ばれるが、喪に服していたり、家に妊婦がいたり、出産があったりしていてもいけない。選ばれた人は體と心を清め大門に縄でしめ縄をはり外部の人の進入を禁止させる。

祭祀を行い、飲福をするときにはその村の人々たちの共同の關心事に對して論議する。洞祭の時、農樂や假面ノリ(假面놀이)、またはムーダンクッ(巫堂굿)をするが、ハフェ村(河回마을)のピョルシンクッ(別神굿)が有名である。

チャンスン(장승)

チャンスンは村の入口に立ちふさがる雑鬼の侵入を防ぐ神である。このチャンスンは村を保護するとともに村の境界と里程標の役割もした。チャンスンは石で作られたり木で作られたりもする。特に石で作られたチャンスンの中で代表的なものが濟州道のトルハルバン(돌하루방)である。木で作られたものは腐るので、村全體の祭祀を行う時ごとに立てられもする。

4. 歳時風俗

お正月 (正月 初日 1월 1일)

この日は年の初めの日である。この日の朝にはお正月の晴れ着(元旦着る新しい服)を着て<元旦回り>茶禮 を行った後大人に歳拜をする。元旦の歳拜を受けると歳拜を述べる人間が望みを成し遂げられるように言葉をかけるのであるが、「今年は奇麗なお嫁さんをもらって結婚したんだね」と言ってもらうのだそうだ。このような言葉を德談と言う。この日に食べる料理には雑煮、**水正果**(スジョンガ 韓國の傳統的な飲み物) 、甘酒などがある。とくに雑煮を食べてこそ年を一つ取ることになると言う考えに基づき子供たちに「雑煮を何杯食べたの」と聞いたりする。

亡くなった先祖には茶例を歳拜にかえて行うが 4 代前の先祖までだけ行う。その以上の先祖はだいたい門中において一族みんなで 10 月に共に祭祀を行う。正初にユンノリ、ノルティギ、たこ上げなどの遊びをする。

正月デボルム(陰歴 1月 15日)

新年初めての滿月を迎え、裏山に上がって炬火をかかげて月見をする。月がのぼるのを一番先に見た人はその年の運が良い。月がのぼると人々はみな橋を十二度行ったり來たりする。このように橋を踏んで行ったり來たりすることでその年は足を病まなくて暮らせるといい₩「橋踏み」と呼んだ。

この日、朝早く起きて最初に見た人に聲をかけ、答えてくれたら「わたしの暑さ失せよ」という。そうするとその年には暑氣にあたらないと言う。

陰歴14日の夕食には藥食と五穀米<五穀で炊いた飯>そして14種のナムルを食べる。そして陰歴十五日になった夜明けに生のクリ、クルミ、ぎんなんなどをかめば腫れ物もできず、歯も丈夫になると言う。

正月のデボルムにはクィバルギスルを飲んでジャップルキョギ、車戰ノリ、ノッタリバプギなどの遊びがある。

三月 サムジンナル (陰暦 3月 3日)

陰歴9月9日に江南に渡って行ったツバメが歸って來るという日である。また草も新たに芽生えて小川の水も豊に流れ始める。このとき蝶も新たに姿を現すのだが万一白い蝶を見るとその年に喪服を着ることになり、黄色い蝶や揚羽蝶を見ればその年の運勢が良くて健康になると言われる。

新たに咲いたつつじの花をつんで餅米粉にまぜて丸いもちを作る。これを胡麻油で煎ってファジョンを作って食べる。

端午 (陰暦 5月 5日)

端午は陰歴5月5日である。この日,女子は菖蒲を切って水に浸けて髪を洗って菖蒲の根は刈って簪を作って頭に挿したりした。こうすれば頭痛を患わないと言われる。また體に良いと言って菖蒲を茹でた水を飲んだりした。

端午の日、女子はぶらんこに乗り、男子たちはシルムをしたりした。この日よもぎで車輪形のもちを作って食べたのだが、そのもちをスリチと呼んだ。端午をスリンナル(수릿날)と呼ぶのはこのもちを作って食べるからだといわれる。

南部ではお盆が重要な祝日であるのに對して北部では端午がより重要視した。これは季節と農事時期の違いによるものである。北部では長い冬からの解放を祝う意味を持ち、黄海道の場合には鳳山タルチュムを踊ったとされる。

流頭 (陰暦 6月 15日)

6月の陰歴15日に東へ流れる水で髪を洗って汚い垢を洗いおとす。そして郊外の川邊で酒を飲んで「スダン」と言うもちを作って蜜物に入れて食べる。またこの日は湖南地方と嶺南地方の

多くの所で農神祭を田や畑に出かけて行う。農事がうまくいくようにと祈り、場所によってはもちを農家に撒いたりする。このような流頭の後に三伏(삼복)の暑さが訪れる.

七夕（陰暦 7月 7日）

陰歴7月7日は七夕と言って農家では雨が降る日として傳えられている。その理由としては「牽牛」と「織女」の傳説がある。彼らは空の天の川の兩岸で互いに會いたがり気をもんでいるのであるが、一年に一度、この日だけは會う事が出來るといわれている。この日その二人を會わせるために地上のすべてのかささぎが空に上がって天の川に橋を掛ける。この橋の名前を「烏鵲橋」と言う。この日に降る雨は牽牛と織女があまりにも嬉しくて流す涙であると言われ、翌日の朝の雨は別れの涙であると言われる。もしこの日雨が降らなければすべてのものが日照りで乾いてしまう。

秋夕（陰暦 8月 15日）

八月のデボルムの日は元日と共に特に農村でいちばん大きな祝日である。暑さが和らぎ新しい穀物が實って收穫する時機であるので一年中で最も豊かな時機である。新羅時代は陰歴 7 月 15 日始めた女子の機織りの試合をこの日、終えて負けたチームで酒と食事,特にソンピョンをふるまって遊んだ。普通は寒食(陰暦 4 月 6 日頃)と秋夕の日に墓參りをする。

湖南地方では仲秋日の明かるい月夜に若い女子が「カンガンスルレ」と言う遊びをする。「カンガンスルレ」とくり返し歌いながら圓を描いて丸く回りながら踊りを踊ることをいうのだが海邊で倭敵が攻めこんで來ることに注意せよと言う意味から生まれたと言われる。

上達　（陰暦 8月 15日）

上達と言うのは陰歴 10 月の俗語である。一年間の農作業をすべて終えて今年收穫した穀物と果物で神と先祖に秋收の感謝を表わす祭祀を行う月である。家の中で「告祀」をあげて山所に行き「時祭」を執り行い、村では共同で「堂山祭」を上げる。時祭はだいたい陰歴 10 月 15 日前後に行う。この時は門中(一族)が集まって 5 代以上前の先祖に祭祀を行う.

この月に食べる食べ物では餃子とカンジョンがある。そしていちばん大きな家庭行事としてはキムチを漬ける作業がある。

冬至

陽歴 12 月 22 日に該當する。一年中で晝がいちばん短くて夜がいちばん長い日で「小さいお正月」とも言う。豆のおかゆを炊いて白玉もちを入れて食べて厄落としのためにこのおかゆを大門に撒いたりする。

このとき新しいこよみを作って分けて持つ。

除夜

12 月末日を十二月つごもりと言ってこの日の夜を除夜と言う。大人にはあいさつをして除夜の鐘を 33 回打つ。この日の夜には寝ないで夜を明かす。これを守歳と言うがもし寝てしまうと眉が白くなってしまうと言われる。ふと眠ってしまった子供がいると粉をこっそりと眉にぬった後、起こして鏡を見せて子供が騙されて泣くのを見て冷やかしてやったりする。こうして夜が明け鶏が鳴けば再び新年の朝が明けるのである。

１．韓国の親戚と門中とは何ですか？
２．韓国人の人名にあるトルリム字について説明してみましょう。
３．韓国の婚礼の風習と、自分の国の婚礼の風習とを比較してみましょう。
４．祭祀の種類について説明してみましょう。
５．ジャンスンの役割は何ですか？
６．地域によって巫俗はどのように異なっているのか説明してみましょう。
７．韓国の歳事風俗(例:ソルラルにはトッククを食べる)の中から３つだけて選んで紹介してみましょう。
８．韓国のソルやチュソクと、自分の国の代表的な名節(伝統的な行事、祝日)とを簡単に比較してみましょう。

この時間では伝統文化について学習をしました。
次の時間は韓国の哲学について学習します。
お疲れ様でした。